大義名分は有効活用

「おぉ、なんか明らかに強そうなビーが出てきたな」

「……あ、あれはクイーンの親衛隊、エンパイアビー・ナイツですわ」

「将軍(ジェネラル)とか宰相(ミニスター)もいるのかな？」

「……本当にやるんですわ？」

　あからさまに嫌そうな……いやまぁ、目の前の光景に突っ込む、と言われりゃ誰だって嫌がる……何人かノリノリで突っ込みそうな知り合いがいるから別におかしいことではないな、うん。

「プランは三つ、結果次第でどれを選ぶかは変わる」

　まず一つ目はエンパイアビー達がカブトクワガタに勝利した場合、この場合はプラン1「ハイエナ大作戦」だ。

　全力でドロップアイテムを拾ってトンズラする、既に無視できないダメージを受けた巣を放置して俺を追ってくる可能性は低いからな。

　次に二つ目はカブトクワガタがエンパイアビー達に勝利した場合、この場合はプラン2「漁夫の利大作戦」だ。

　カブトクワガタの損耗次第だが瀕死であるならば俺がトドメを刺す。無理そうなら適当に蜂のドロップアイテムだけ拾ってトンズラ。少なくともエンパイアビーの巣という特大の蜜貯蔵庫よりも俺を優先する理由はないだろう。

　そして最後に三つ目は相打ちでどちらも倒れた場合はプラン3「ラストスタンド大作戦」だ。

　悠々と全部かっさらう、以上だ。

「というわけで個人的には壊滅するくらいエンパイアビーには頑張ってもらいたい」

「あ、悪魔ですわ……！」

　そういやこのゲーム、「神」は存在するみたいだが天使悪魔っているんだろうか？

「よっしゃ行け行け、やれ！ おいおいもう少し踏ん張れよ甲虫王者！」

　カブトクワガタがその重量を攻撃力にフルに換算するには飛ぶことが必須条件であり、その為には堅牢な甲殻を開いて無防備な翅と胴体をさらけ出さなければならない。

　カブトクワガタが一度突進を敢行すれば、十数匹規模で蜂が砕け散る。だが、エンパイアビー達も負けじと針をミサイルの如く飛ばし、その殆どは高速で動くカブトクワガタの翅に弾かれるものの何本かをカブトクワガタの胴体に突き刺す事に成功している。

　巨大にして強力な個と矮小ながらも精鋭たる群の戦いは、レイド戦に挑むプレイヤーのようで。蜂達は砕けた同胞のポリゴンの吹雪を浴びながらも、一切怯むことなくカブトクワガタを追い詰める。

　だがカブトクワガタとてただ狩られる獲物ではない。その身は強者として設定されたもの、幾本もの針を受けてなお不沈。それは例えるなら暴れ狂う暴風、猛り爆ぜる雷霆。

　一挙一動が弱者を殺し得る必殺であるその顎が、角が、遂に蜂達の司令塔のさらにその上……大局的視点で蜂達に命令を下していた宰相(ミニスター)を砕く。

「おお、見ろエムル。ついに女王が直々に出張ってきたぞ」

「はわあ……！」

　命令系統が崩壊しかけたエンパイアビー達が規律を取り戻す、忠誠を思い出す。半壊した騎士団(ビー・ナイツ)が彼女を守るように隊列を整える。狩人(ハンター)が、番兵(ガーダー)が、労働者(ワーカー)が精鋭が如くカブトクワガタを取り囲む。

　カブトクワガタもまた、己に楯突く弱者の首魁を見据えて顎をガチガチと鳴らす。全身を薄く覆う光はもしや魔法か？

「さぁ勝利の女神は一体どちらに微笑むのか、解説のエムルさんどう思いますか？」

「か、解説！？ アタシそこまで詳しくないですわ！」

　そこは適当に「いやぁ、もはや我々には推し量ることすらできませんねぇ」とか言っておけばいいんだよ……流石に無茶振りか。

　思わず実況したくなるエンパイアビー・クイーンとカブトクワガタの相対……そして彼らは激突する。

その決着は。

　ひび割れ、砕けた甲殻。左の大顎は半ばからへし折れ、右眼には巨大な針が突き刺さっている。だが……カブトクワガタは己の角に貫かれて絶命した王国の女王蜂《エンパイアビー・クイーン》を乱雑に頭を振って引き剥がす。

　既に頂点を失ったビー達は方々に四散し、勝者が一体誰なのかを如実に示している。

「お前の敗因(・・)は、強いて挙げるなら三つ」

　エンパイアビー・クイーンの身体がポリゴンへと変換される。他の蜂達と比べても大柄であった女王はその体躯に相応しい爆散と共にポリゴンを撒き散らす。

「一つは安全策を取らなかったこと、一つは妥協せずに蜂との戦いを決着させたこと……」

　降り注ぎ、消えていくポリゴンの中をゆっくりと近づいてくる影に、カブトクワガタはそれでもなお戦意を滾らせる。それは傲りであり、誇りなのだろう。だがそのプライドは、このMobから大事なデータをすっぽ抜かせてしまったらしい。

「最後に、目先の蜜に気を取られて俺を見逃したこと」

　これが闘技場の1vs1(タイマン)だったなら、カブトクワガタの選択は誇り高いものとして賞賛されただろう。だがこれは弱肉強食(サバイバル)、勝利とは打倒ではなく生還を指す。

　満身創痍でなお戦闘を選んだ時点で、それは最悪手だぜ。逃げるコマンドは恥じゃない、不退転プレイはHP管理をミスった時点でただのリスポン待ちだ。

「プラン2だ、誇りを抱えて俺の糧(EXP)となれ」

　女王はよくやってくれたよ。お陰様でこいつのモーションは体力が少ない時の特殊行動も含めて把握できた。

　それじゃあ……全部まとめていただきます。

・クアッドビートルの勇角

クアッドビートルの撤退を知らぬ猛々しき角。非常に頑強なそれは武器や防具に非常に重宝する。

生まれついて好戦的な彼らの生涯は短く、それ故に永く生きた個体は強い。

・クアッドビートルの凄顎

クアッドビートルの立ちふさがる困難を打ち砕く凄まじき大顎。驚異的膂力あっての斬れ味は人が十全に扱うことは不可能。

永く生きた、即ち永く勝ち続けた個体は逃走を死よりもなお嫌う。

・クアッドビートルの重甲殻

クアッドビートルを強者たらしめる重厚な甲殻。重く、硬いそれはクアッドビートル以外が扱うことを考慮していない。

クアッドビートルの素材を使った武具は古来より退却知らずの破軍の象徴とされた。

・クアッドビートルの鱗扇翅

クアッドビートルの身体を浮遊させる強靭な翅。その秘密は鱗のように幾つもの「翅膜」が重なって一枚の翅を形成している。

ただ戦い、ただ進み続ける彼らの死に場所は戦いの場の他にはない。

「いやぁ大量大量！」

「むむむ……なんだかズルい気がしますわ……」

「それは違うぞエムル。あのカブト……いや、クアッドビートルは逃げることだってできた。実際追ってまで倒すつもりはなかったし……だがあいつは逃げなかった、それが全ての答えだ」

「じゃあエンパイアビーは？」

　俺はそっと目をそらし、口笛を吹いた。コラテラルダメージだよコラテラルダメージ。

「まぁなんだ、弱肉強食の世界じゃ生き残った奴が正義ってことさ」

「うむむ、それを言われたら何も言い返せないですわ……」

　随分と懐が重くなってきた。第二インベントリ……げふん、もといエムルにも結構持たせているというのになお重いインベントリが、壊滅したエンパイアビーとクアッドビートルでどれだけ荒稼ぎしたかを如実に示している。経験値こそクアッドビートルの分、それも瀕死故にあまり多くない量しか稼げなかったが、それでもレベルアップまであと少し。エリアボスに挑む前にどこかでレベルを上げておきたい。

「そういえばこのエリアのボスって確か蜘蛛なんだっけ？」

「そうですわ、クラウンスパイダーは糸を操って色々してくるんですわ！ ぱーん！ とかぼぼーん！ とか！」

　ほう、蜘蛛か……糸を使ってアクロバットするタイプと子蜘蛛を使うタイプ、単純に襲ってくるタイプ……蜘蛛型モンスターも大抵ありがちなモンスターだが、最早俺に油断はない。ノーダメノーコンテのパーフェクトで攻略してやるぜ！

　で、ぱーん！ とかぼぼーん！ って何だろう……？

　と、まぁ意気込んだはいいが、俺達はボスエリア前というあと少しの場所でありながら、目下木の上で隠れながら下を見ている状況である。

「まぁそりゃプレイヤーがいても不思議でもなんでもないが……出鼻を挫かれたな」

「剣士、剣士、剣士……なんというか、偏ってますわ」

「分隊全員衛生兵よりかはマシなんじゃないかな」

　あるFPSでの話だが、調整ミスで死んでも数秒は自分の身体を動かせることから、自分を蘇生する事でゾンビが如く不死と化した衛生兵達が泥沼の陣取り合戦をする紛争地帯はまさに不毛という言葉がぴったりだった。

　それに全員前衛は必ずしも悪手ではない、火力で押し切るのなら下手に前衛後衛で分散させるよりもどちらか一方で固めた方が早く済むことはままあることだ。全員魔法職で超火力短期決戦とかクソゲーじゃなくてもよくある光景だ。

　それはともかく、俺達が隠れているのはこのエリアのボスに挑む先客がいたからだ。三人パーティを組んだ彼らは皆剣士、という偏った編成ではあるものの、少なくとも俺のようにほぼ裸装備ではないし、損傷が少ないことからレベルもそれなりに高いことが窺える。

「……時折普通に服を着ることができているやつをどうしようもなく羨ましく感じる」

「普通それは羨むようなことじゃないですわ……」

　遠回しに俺が普通じゃないってか……普通じゃないな、うん。少なくとも一般的なルーキープレイヤーは装備欄潰れたりしてないわ。

　彼らが大木のうろ(・・)の中へと入っていくのを確認し、木から飛び降りる。薬草をもしゃってミリの落下ダメージを癒しつつ、俺は彼らが入っていったうろへと歩いていく。

　いや、他プレイヤー（パーティ）が挑戦中は当事者以外のプレイヤーは中に入ることはできないが、中を覗くことはできる。情報収集という意味合いもあるにはあるが、単純に他のプレイヤーがどんな風に戦っているのかを見てみたい。他人のゲーム画面覗き見現象とでもいうべき誘惑に特に抗うこともなく、俺はエムルを頭に乗せながらうろを進んだ先、エリアボスのフィールドを覗き込む。

「おお、エムルの言った通りだな」

　やけに派手な柄をした……ああ成る程、王冠(クラウン)じゃなくて道化の蜘蛛(クラウンスパイダー)か、クラウンスパイダーが中身を繰り抜くようにして縦に伸びた円柱状のエリアを時に糸をロープ代わりに、時に上空に張り巡らせた糸を綱渡りのように飛び交っている。ああ、こっからじゃ見えない位置に行ってしまった。

　三人のプレイヤー達は悲しきかな、見事に遠距離手段の乏しさを突きつけられているらしく、ただ一人魔法が使えるらしいプレイヤーがちまちまと火の玉を飛ばしているが、見た限り有効打とは程遠い。

「そこは無駄撃ちしないで降りてくるまで待ちだろ……！」

「ああっ、危ないですわ……！」

　なんというか、ポップコーンとコーラが欲しくなる。あと椅子。

　完全に観戦者モードになった俺とエムルをよそに、三人の剣士達はようやく待ち構えることを思いついたらしいが、その瞬間上から降ってきたのはクラウンスパイダーではなく、人が乗るタイプのバランスボール程はある巨大な糸の玉。

　見事糸玉は三人のうちの魔法を使っていた一人に命中し、見た目の割に驚くほど柔らかく、そして粘っこいそれはトリモチよろしく魔法剣士の身動きを封じてしまった。

「うわえげつねぇ、上空から物を落としてくるのか……」

　身動きの取れない魔法剣士を助けようとしていたプレイヤー二人が上を見て突然慌てふためいて逃げ始める。

　何事かと思えば次の瞬間、魔法剣士が上から降ってきた丸太に押し潰されて……あ、死んだ。

　そこからはもうどうしようもない。遠距離攻撃手段を失った二人の剣士はジワジワと追い詰められていく。最後は身動きが取れない中、クラウンスパイダーに糸巻きにされてゲシゲシと脚で蹴られ続けた末にポリゴンとなって消えて行った。

　途中、最後に残ったプレイヤーが俺に気づいていたが、俺にできるのは情報提供を身を以て示してくれた彼らに合掌することくらいだった……南無南無。

「さて、彼らの尊い犠牲のおかげで大体把握できた」

「切り替え早いですわ！？」

　どうせサードレマでリスポーンしてるんだ、感謝はすれど追悼なんてするわけないだろう。彼らのおかげで大体のボスの特性は理解できた、宣言通りノーダメノーコン行かせてもらおうか。

おっとその前にレベリングレベリング。

分かってはいましたがストックが溜まるのが目に見えて遅くなったので焦りますね……

エンパイアビー内部の役職としては

女王（エンパイアビーのトップ、全体バフなどを使用する上に本体も強い）

宰相（実質的なナンバーツー、宰相が生きている限りは全ての蜂は統率された動きを可能とする）

将軍（女王を除けば配下の蜂の中で最も強い個体、十数匹程度を対象に強力なバフを使用するため騎士団と組まれると極めて厄介）

騎士団（巣、ひいては女王を守る蜂の群れ、女王を第一とする精鋭でありなかなかに厄介）

番兵（巣を守る防衛の蜂、耐久力が高めに設定されているが攻撃力は狩人に劣る）

狩人（労働階級、蜜ではなく餌としてモンスターを狩るのが役目のため獲物が汚染されないよう毒を持たない）

労働者（労働階級、蜜や花粉を集めるのが役割だが他の生態ピラミッド上位からよく狙われる、救難信号持ち）

極々稀にエンパイアビー・プリンセスがいたりします。姫からドロップするアイテムがないと作れない武器防具があったりなかったり